

武満 徹：《SONGS》より

武満の独唱曲は、独特の語り口が魅力で、器楽曲にはない味わいがある。1983年に作曲された「島へ」は、テレビ番組の挿入歌として作られたが、番組では使用されず、石川セリの歌唱で世に出た。1982年作曲の「翼」は、演劇作品の主題曲（器楽曲）として作られたが、これも歌としては石川セリの CD 録音が初演となっている。

ドビュッシー（小胎 剛編）：亜麻色の髪の乙女

1910年に出版された《前奏曲集 第1集》の第8曲で、ドビュッシーのなかではもっともポピュラーな音楽であろう。今回は日本のクラシック・ギター界の重鎮・小胎剛（おたいつよし）による編曲版でお届けする。

ドビュッシー（鈴木大介編）：レントより遅く

《前奏曲集 第1集》が出版されてすぐに発表されたピアノ作品。遊び心を感じさせる、ゆったりとしたロマンチックなワルツで、往時のパリのカフェを偲ばせる。

バルトーク（A.レブリング編）：ルーマニア民俗舞曲

全6曲からなるピアノ組曲で、1915年の作。各曲は非常に短いですが、それぞれ性格の異なる濃厚な民俗性が感じられる。当時ルーマニアはハンガリー王国の一部だった。バルトークの小品のなかでも人気が高く、1917年には作曲家自身により管弦楽用に編曲されたほか、様々な編曲版が存在する。

ファリャ（K.ラゴスニヒ編）：スペイン民謡組曲

1914～15年に作曲された《7つのスペイン民謡》は、スペイン各地の民謡にもとづき、荒々しいリズムの脈動に込められた情熱、神秘的なまでのメロディが描かれている。《スペイン民謡組曲》は、ヴァイオリニストのパウル・コハンスキが、ファリャの協力を得て（第2曲を除く）6曲をヴァイオリンとピアノのために編曲したもの。本日はオーストリアのクラシック・ギター奏者コンラート・ラゴスニヒによる編曲版でお届けする。

A.トロイロ（飯泉昌宏編）：ラ・トランペーラ

1950年発表の軽快なミロンガで、タイトルは「嘘つきな女」という意味。アニバル・トロイロはタンゴ黄金期から活躍するアルゼンチンの作曲家・バンドネオン奏者。

J.C.コビアン（飯泉昌宏編）：酔いどれたち

ブエノスアイレス生まれの作曲家ファン・カルロス・コビアンが1922年に書いたタンゴ屈指の名曲。もとは「麻薬中毒者たち」というタイトルだったが、それをアニバル・トロイロ楽団がタイトルも変えてヒットさせた。

R.ディアンズ（三浦一馬編）：タンゴ・アン・スカイ

フランスのクラシック・ギター奏者ローラン・ディアンスが 1985 年に出版。「スカイ」とはフランス語で合成皮革のことで、曲名は「タンゴもどき」といった意味。即興演奏が得意なディアンスならではの軽快さで、タンゴの風味が凝縮された曲になっている。

ピアソラ（徳武正和編）：タンティ・アンニ・プリマ

タイトルは「昔々」という意味で、もとはマルチェロ・マストロヤンニ主演の映画『エンリコ 4 世』のために書かれた。甘美な旋律がどこか映像を感じさせる。

ピアソラ：《タンゴの歴史》より

《タンゴの歴史》は、1980 年代に書かれたフルートとギターのための 4 部作。アルゼンチン・タンゴがたどった時代区分を表現している。タンゴの出生から、哀愁を感じさせる音楽へと変化し、次第に洗練の度合いを深めていく。

ピアソラ（O.モンテス編）：リベルタンゴ

1974 年の作品で、イタリアに渡ったピアソラの第 1 作。日本におけるピアソラ・ブームの火付け役となった曲である。